
梅園さん家のたまきとまどか

サユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅園さん家のたまきとまどか

【NNコード】

N8627Z

【作者名】

サコ

【あらすじ】

梅園さんの家の姉妹は今日も元気です。元気担当物知りお姉さん・環^{たまき}と、おつとりした料理が趣味の妹・円^{まいか}、二人は美人姉妹と近所で評判です。昔から円はお姉ちゃんが大好きです。環も妹が大好きです。でも、一人の気持ちはちょっとだけ違うようです。姉妹は私立菖蒲ヶ丘女子高等学校に入学します。そこで出会った友人と一緒に過ごす日常は毎日が遠足以上。毎日がときどき、わくわく、ふわふわでいっぱい。みんなと一緒に、ゆるやかな坂を一踏みずつ歩いて行くように、今日も姉妹は成長中です。 四コマ風。 42文字

× 36行の見開き（よくオーバーしますが一枚分におさめています）
ごとにお話が進んでゆきます。ふわふわしながら連載開始です。

キャラクター紹介や、学校紹介など、設定も随時更新してみます！

評価・感想・ご意見、要望あればたぐさんください！

梅園ちひるのたまおじめじか

私の名前は梅園まどか。

お姉ちゃんの妹をやつています。

私の朝は早い。

お姉ちゃんよりも、ずっと早くに起床する。
パジャマ姿から制服に着替え、エプロンをひっかけて、私はキッチンに立つた。

「今日は雲一つない快晴だ」

小窓から澄んだ空が覗いている。

「ん~、一度寝したら気持ちいいだらうなあ」

そんなことを呟いてはみたものの、ダメダメ、やるいじとこつぱい
なのです。

私はお姉ちゃんのためにお弁当を作らなければいけないのです。
ついでに、あくまでついでなんだけど、自分のもね。

日付は四月一日。

今日は高校の入学式。

私が得意とするお弁当作りで張り切らないわけがない。

こんな気持ちのついた日は公園でお弁当を広げると、美味しいんだ
よなあ。

「……入学式も大きな公園でやればいいのに」

そしたら、青空の下で私の作ったお弁当を頬張るお姉ちゃんを眺
められるのに。

んー……、お姉ちゃんはもう高校生なのだし、かよひとときわつ
にないか。

「……いえ、高校つて遠足あるの？」

「……あ、みつけた」

私は食器棚の奥に重箱をみつけた。

それをひっぱりだして、にやけてみる。

お姉ちゃんの好物は、アスパラベーコン炒め。

ベーコンはちょっとだけ焦がしたもののがいいんだって。

噛みしめるとじゅわっと味がしみ出るらしいよ。

私は、だから、火力強めで一気に炒めることにした。お姉ちゃんの好みの通りに。

私はお姉ちゃんの事でわからないことはないよ。お姉ちゃんの方が物知りなんだけどね。

「ん、いい匂い。お姉ちゃん、喜んでくれるかなあ」

よし、高校生活を始めるにふさわしいお弁当を作るぞー。

でも、高校つてどういうところなんだろう。

バナナはおやつに含まれちゃう校則とか、あるのかな。

お姉ちゃんは知っているかな。

あとで聞いてみよう。

チクタクチクタク。時計の音がちょっとびり大きい。

午前六時のキッチンはちょっとびり寂しい。

お姉ちゃん、早く起きてこないかな。

梅園さん家のたまきとまどか 2

妹ちゃんの名前は梅園たま。

私と合わせて円環になります。んんと、円環姉妹とか、小学生の頃は言われてたなあ。

名前、
好き。

お姫ちゃんも同じ気持をたどりした

午前七時

私は二階は上がるが、お姉ちゃんの部屋の扉を開けた。そこそこ起こさないと、遅刻してしまう。部屋を覗くと、お姉ちゃんはまだ寝ているみたいで。

一 おねーちゃん

元亨利貞

ムは二十九歳三月生まれで、ばばつ

……あれ？ あれあれ？ 巨大てるてる坊主が現れたよ。大きさ
は私と同じくらい。

な。」
（二）

「おじか、それは今田の記念すべき入学式との口を快晴にするための、かりんとうの袋に入っていた乾燥剤をふんだんに詰めた、たまき特性てるてる抱き枕だ！ どうだこの快晴つぱり！ つりやあ… おはよおじまじかー、うつやうつやうつやうつやー。」

背後からお姉ちゃんがエンカウントしてきたよ！ どこから現れ

朝からもみくひやこひでるよ……！ ああ、でも、お姉ちゃん

は私の好きなところを知っているから、なんだか手足が痺れてきた。

「おねえちゃん……ん……」体に力が入らないや。

頭を撫でられるのは、気持ちが良いよね。

「これが忍法変わり身の術だ。まだまだ隙だらけだな。はつはつは

「忍法使われたら、勝てないよ」

振り返ると、姿見で映し出されたような私の分身が高校の制服を着ている。

ぐりぐりした大きな瞳に、さらさらの髪の毛。やっぱりこつどもお姉ちゃんはかわいいな。

「ううう、姉妹と言つても、私たちは双子なんだよね。違うのはほぐりの位置だけだよ。

私は脣の右下に。お姉ちゃんは脣の左下に。だから鏡合させ。鏡映文字のようだつてお姉ちゃんは言つていたよ。

「あれ、まだか、なんで中学の制服着てるんだ?」

「おう?」どういふことでしょう?

「さては寝ぼけてるな。昨日『同じ高校に行けるんだよねー?』本当にお姉ちゃんと一緒に!/?』とか興奮しすぎて寝れなかつたか?『あ、そつか。私も今日が高校の入学式だつたんだ。でも、寝ぼけてないよ!』

ん~、でもどうして間違つたんだろう?

頭をくしゃくしゃされて、少しだけ恥ずかしい気持ちになつた。
「お姉ちゃん、高校つてどんなところかな? 遠足にバナナ持つて行つてもいいのかな?」

「まどか、高校はな、遠足よりも楽しいことがいっぱい待つてゐるぞ! バナナだけでなく、かりんどうだつて持つて行つてもいいんだ! だから毎日が遠足だ。いや、毎日が遠足以上だ! 覚悟しつけ!」

ビシイツとお姉ちゃんは決めポーズ。

なんだか、私、ワクワクしてきた。そつか、私も高校生になつたんだよね!

入学式とお弁当と空き教室

校舎前の掲示板で私は驚いていた。

まさか、こんなことが起るなんて、夢にも思っていなかつたら
ら。お姉ちゃんは言つた。

そのまさかだよ。

「……しかし、話題作りの一環なんだろ? な。家が同じなら情報の
発信源を一つにまとめることができるし何より色々と教師側の手間
が省ける。二人で一つ扱いか……、図られたな」

そう、私とお姉ちゃんは同じクラスになれるようです。

ほら、ちゃんと見て。指さして。はいチーズ。

パシヤ。

というわけで、私は浮かれています。写メ撮っちゃつた。

お弁当を抱えながらだつたから苦労したよ。でも、お姉ちゃんの大
事なお弁当だから一緒に写りました。あ、まだ中身は秘密なんだ。
なので、お姉ちゃんがどうして怪訝な顔をしているのか、わから
ない。

「もしかして、イヤ?」

「そんなわけないじゃないか。ウチは姉として、まどかから田を離
さなくて済むから一安心だ」

つうふんと、つまりそれは、『お姉ちゃんはまどかから一瞬たりと
も田を離したくない田を離したら死ぬ。いやむしろ死ぬ』って事だ
よね。嬉しいけど、まだ朝だし、玄関先だよ? 気が早いなあお姉
ちゃんは。

校舎に入ると、初めて嗅ぐ匂いがした。これが 高校。

ていうか、女子校! 右も左も女の子だらけ! 桃源郷っていう
か、百合源郷?

すんばらしい。

だめだめ、私にはお姉ちゃんがいるのです。浮気、ダメ、絶対。

「にしても校舎に入る前にこの学校の体质に一石投じたくなつたぜ」

「なんで？」

新品の靴をあわせながら、一年生の階を田指す。……
といつても半歩先を行くお姉ちゃんの後について行つてゐるだけ。さ
つき、何年何組か見忘れちゃつた。あ、一年なのは間違いないよね。
「めんべくがりがあつだからだ。双子を一括りにするとか、怠
惰だら」

「ううかなあ。私は嬉しいよ」

むつかしい言葉を使われたので、率直に感想だけ。
お姉ちゃんは、やつぱり物知りだ。

「ウチも嬉しいぞ。だがな、きっと面倒なことになる。そもそも、
それも予定調和か」

ガラガラと教室の扉をお姉ちゃんは開ける。

あ、そういうえばここ何組なんだろ？ つまり私は何組？

私は上を向きプレートを確認する。四組だそうです。

と、教室がどよめいた。私は上を見たままよろめいた。お姉ちゃんにぐいっと引き戻される。

「……双子だ！」明るい声。教室には半分くらい生徒が集まつてい
た。みんなの視線が一いつひに集中している。そつか、珍しいんだつ
け。

「……ああ、めんべくせえ。コレだよコレ」お姉ちゃんが私を置
いて先に教室に這入る。

「待つて待つて！」

私も慌ててその後ろに付いていく。

なんかお姉ちゃん、機嫌悪いなあ。なんとなくわかるんだよね。
確かに私も、お姉ちゃんの事を興味津々に見るクラスメイトが、
お姉ちゃんに恋をしてしまわないか、本気で心配です。

お姉ちゃんのかわいさは、珍しいからね！

どうしよう、お姉ちゃんを巡るライバルが、いきなり増えちやつ
たかもしれません。

ライバル……多すぎるとよ……。

入学式とお弁当と空き教室 2

校歌斉唱は歌えませんでした。

作詞者の名前が特に難しかったよ。龍ヶ嶺そ、そー……、なんて
読むの？

そんな風にプリントとにらめっこしたら、みんな座つててびつ
くりしたよ。

いつ終わったの？ お姉ちゃんも教えてくれればいいのに。つい、
今は私の前に座つてているんだつた。……首だけぐるつといいち向か
ないかな。

ところで、他のクラスの子かな？ 歌つてたんだけど、いつ練習
したの？

不思議だなあ。

にしても入学式は眠たいなあ。

校長先生の話が長いよ。眠いよ。睡眠導入剤つてやつだよ。ほら、
不眠症になつたアイドルがよく飲むやつ。え？ そんなのない？
お姉ちゃんに聞きたいけど、聞けないしなあ。

それより。

びつくりしたことがあつたよ。

誰かに聞いて欲しいよ。

でもお姉ちゃんに話しかけたら、先生方に印象悪いよね。
お姉ちゃんの印象が悪くなっちゃうことはしてはいけない。我慢

……でもつ、

「あ、あの。どうして校長先生、男、なんでしようか、ね？」

訊いた！ 隣の子に訊いた。

悪いことしている私、現在かつこいいかもしません。

ドキドキして、隣を向くことができないから、ちゃんと聞こえて
いるかな？

不安だけど、どうしよう、横向けないよ。

「ぶつ」

あれ？なんか吹き出されちゃった。

と思つたら、くすくすと周りが笑い始めたよ。

あれ？お姉ちゃんまで肩が震えてる……！

「ねえ、本氣で言つてんのアンタ。何ソレ、もう笑わせないでよ」隣の子に小声で返されて、ついでに脇腹を突かれた。その子はまた「くくっ」と笑い始めた。

私はぎりぎりと口ボットみたいに首を曲げて「どうして？」と小声で返す。

「うちの担任も男でしょ？が。女子校でも男の先生くらいくるわよ」そういえば、初老のおじいちゃん先生でした。

「ハートキヤツチ、ばつちりね」

ワインクされちゃつた。映画以外で初めて見たよ。

その子は大人っぽい人でした。切れ長の目で、なんだか諭されているみたい。

ほわわっとウェーブのかかった髪の毛は、毎朝コテでセットしてるのがかな？

「そ、そりゃんだ。物知りだね」

お姉ちゃんどどっちが物知りかな？

「アンタ、それ狙つてるの？……いえ、『じめんなさい』やつこいつ感じはなさそうね」

「どういう感じ？」

「どうもいひもないわよ。……アタシの名前は鶴来冴子^{つるぎわさえ}。よろしくね」

鶴来さんは、田であなたの名前は？と訊いてくる。でもどうしてわかつたんだろう？

「あ、ええつと、前に座つているのがお姉ちゃんのたまきです」

「じゃなくてあなたの名前」

「はうん」まだ紹介途中なのに。いつもそなただけど、私はお姉ちゃんを紹介してからじゃないと、自分の事を話せないんだよ。

私は息継ぎをして。

「まどかです」

「双子なのね。でも同じクラスになるなんて、そんなこともあるのね」

お姉ちゃんと同じ事を言つんだ。そんなに珍しいのかな?

「……無礼かもしれないけど、あなたたち見分け方とかあるの?」

「あ、よく聞かれますから、大丈夫ですよ。私たちは簡単です。美人な方がお姉ちゃん」

相違ない。お姉ちゃんは誰よりも美人でかつこいいんだから。

「……あの、アタシには……、『めんなさい、似すぎてわからないわ』

「双子素人だからですよ、きっと」

お姉ちゃんの魅力に気がつかないなんて。お姉ちゃんを早く紹介したいなあ。

「あなた、まどかちゃんだつけ。面白いのね、とてもん? そんな面白いこと言つたかな? そういうえばせつきも笑われちゃつたつけ。

今も笑いをこらえているような……。私、へんかな?

「なんだか、いい友達になれそうな気がするわ。今年一年間、よろしくね」

「う、うん」

胸がほわつとなつた。「うん」って言つたけど、胸の中では「つっそー」くらい思つてる。

綺麗な笑顔……、でも、ダメダメ! これは違うよお姉ちゃん。どうしよう、お姉ちゃん。いきなり友達できちやつたよ。名前は、鶴来冴子さん。

ああ、早くお姉ちゃんに伝えたい!
これが高校……すごいところだね!
でも、安心してお姉ちゃん。浮氣はしないから。
だから、あとで一緒に弁当食べようね。

じめへ私は田舎へおひるひじました。ね、寝てなよ。

入学式とお弁当と空き教室 3

「ところが、お友達……できちやつたみたいなの、お昼休み。教室に戻ってきたよ。やつとお姉ちゃんに、報告だよ。何事も、組織ではホウレンソウが大切とお姉ちゃんは言つてたし。姉妹は……ん……組織つていうのかな。」

「その言い方、なんか使うシチユ間違つてないか？」

お姉ちゃんが椅子の背もたれに肘をのせて、威厳たっぷりに座っている。

「えー。そうかなあ」

「『できちやつたみたいなの』……つて、新妻か！ 妻夫木か！」
どうして突つ込まれたのだろう？ でも、『できちやつたみたいなの』と私の真似をするお姉ちゃんかわいいなあ。
腰のラインが、いいんだよね。わかるかな。

「ところで、お姉ちゃん。そのお腹をさする手は何？」

「三ヶ月つてところかな」

鈍い私でもわかつちゃつたよ、そのジエスチャー。……私との子？
「でも、できちやつたんだよ？ お姉ちゃん」友達がね、いきなり
だよ？

「まあ、お姉ちゃんところ存在は妹よりも先にできるのかもしけな
いが」

まだ言つの！？

「最近の動向だと、『できちやつて』から、婚姻届を取りに行く男
女が多いらしいわよ」

鶴来さん、大人っぽい発言で広げないで！？
恥ずかしいよ。

私の机の横に椅子を持つてきて座っていた鶴来さんが小さなおこ
に指を当てる。

鶴来さん、お姉ちゃんとも仲良くなってくれそうだよ。

大人っぽくて、美人で、お姉ちゃんとはちょっと違つけど、しっかりもののさんのイメージかな。背は私たちよりも、少し高くて、スラッとしてるんだ。ウェーブのかかった腰くらいまである髪の毛に、きりりとした切れ長の瞳。怖い人なのかなとも思つたけど、そうじやなかつたみたい。

「『できちやつたの』という台詞のありがたみが半減つつい全壊だよな、そくなつちまつたら」

「クリスマス前にプレゼントの隠し場所を当ててしまつた時の残念感よりもひどいものね」

「だよなー。地上で爆発しちやつた三尺玉くらいかもしぬないぞ」

「ふふふつ」「はははつ」

え、二人だけで笑わないでよ。どこで笑えばよかつたの？
なんだかこの二人、仲良くなりそうです。

どうしよう、このまま鶴来さんがお姉ちゃんのこと好きになっちゃつたら。

「まじかもそう思つか？」

「え、ええと……、うん、そう思つよ」

なんとか私も話題についていかなきや。大人の階段だつてのぼつてみせます。

にしても、どうしよう。んー。

あ！ そうだ。

「お、お昼だしさ、お弁当食べよう？ 私、今朝作つてきたんですよ。鶴来さんも食べます？ たくさんあるから、三人で食べてもじゅうぶんだと思うんですけど」

私はそれを言ひながら、重箱（四段重ね）を「うんしょ」と机の上に置く。

ズシイツとくる重さは、本物だね。

この重さは私の愛だよ。愛なのだよ。愛の結晶なのだよ。大人にはわからない愛！ なんちやつて。このお弁当はね、登校日初日、入学式、様々なイベントに華を添える、

まどかスペシャル まんぷく弁当 四段腹！

です。

お弁当箱のイラスト、お相撲さんなんだよね。えへへ。アマゾンで買ったよ。

むつかしい話はやつぱりお姉ちゃんの専売特許だから、あまり会話に入れないかもしれないけど、鶴来さんとも仲良くなりたいけどでもライバルだけどでも今日はお腹も空いたし……、青空の下とはいかないけど、友達とかね、みんなで食べたら美味しいんだから。

ガラガラ

扉が開く音で、教室がトーンダウン。

ふわいしゃあ帰りのトロ始めますよ」
え？ え？ あれ？ あれあれ？ ほお、私、落ち着いてみます。

入学式とお弁当と空き教室4

「引きずられるやつにして、下駄箱のところまで来ちゃったよ。

「そんなに落ち込むなよ。まじか」

「だつて……。だつてせ……」

「さすがに凹むよ……。

「お姉ちゃん、まさか入学式だけで今日は終わりだと思わなかつたんだよお」

「ちょっとだけ、腕を振つて抵抗してみる。

「案内には書いてあつたわね」

「え、そつなの？ 穴が空くくらい読み返したのに……。

「たまきちやんは知らなかつたの？」

「いんや、知つてた」

「え、知つてたの？ つて当たり前だよね、お姉ちゃん、何でも知つていいし。

「……どうして教えてあげなかつたの」

「まじかも知つていてと思つてたんだよ～」

「お弁当一緒に作つてたんでしよう？」

「いやー、ウチは寝てたからなあ。家を出る時、入学式だけの割には荷物多いなあとは思つたけどね。まじかはいつも荷物多いかんなあ。はは」

「うう。みんなで食べたいなあ。お姉ちゃんもビートなく寂しそうに笑つてるし。

「たまち……ちやんは、ちょっとだけ、アタシの知り合いでにじょと似てこる……ちょっと」

「ん……冴子、なんか言つたか？」

「ううん、何でもないわ。意識すると、アイツは現れるのだから。

……鎮まれアタシの右腕

鶴来さんがなんか怖いです。手からエメラルド色光が……、錯覚？

でも、お弁当、学校で食べたいな。

「お姉ちゃん。鶴来さん。学校にこつそり残つて、食べていへ」と、
できないかなあ」

上履きのまま、玄関先で体育座りをする私。
「わがままな妹を持つと苦労するなあ」

「ごめんね、お姉ちゃん。

「せつかくだからアタシも是非とこうじるなのだけじ、んー、た
しか閉門時間があつたわよね？」

鶴来さんは鞄を肩にかけ直しながら、門の方を確認する。

もうあまり生徒もいないし、やっぱりみんな帰つたのかな？

「いんや、あるにはあるが、実は今日から上級生は部活がある」

「あら、じゃあ残つても平気なのね」

「やうこじこと。でもこっちの本堂は鍵がかかるから、部室棟にい
かないと締め出しをくらうだらうな」

私立菖蒲ヶ丘女子高等学校はね、本堂と部室棟と複合体育館と陸
上トラック付きグラウンドと野球場と……ええと、あとなにがある
んだっけ？ とにかくとても広いんだよ。

「それで生徒数が少ないのね。部室棟つて、旧校舎よね」

「そうそう。まあ、結構校則キビシイからなあ、ウチは。……問題
はどうで食べるか」

後頭部をぽりぽりかいて、なにやら考えるお姉ちゃん。

そして、少しだけ沈黙した後、お姉ちゃんは腰に手を当て、胸を
張つた。

お姉ちゃんは自信満々に叫ぶ。

「お姉ちゃんパワー……！」

「……よくこんなところの扉をつけたわね。上級生でもこの扉が開いてたこと、知らないんじゃないのかしら？」

「開いてたんじゃない。開けたんだ」

「え」

「このお姉ちゃんパワースーツの一つ、針金くん一号でな」と、お姉ちゃんは手の中の針金をもてあそぶ。「ピッキングじゃないのよ。ていうか、いつ鍵穴を開けたのかわからなかつたわ……」

鶴来さんがふわふわの髪の毛を揺らしながら、驚いている。私だつて驚いてるよ、お姉ちゃん。

本当にお姉ちゃんはす「」いなあ。

ほんと、どうやつたの？ 不思議だなあ。

「こじならお弁当広げても何も問題ないだろ。むしろお弁当を広げるべき場所だ」

鼻を鳴らすお姉ちゃん、かつこいによ！ 世界一だね！

「なぜならこじは田校舎の家庭科室。家庭科室は料理をするといふ。料理をするといふは食べるといふ。食べるといふはウチらの国十ヶ。相場はそう決まつている！…」

「……乱暴な二段論法ね。でもまあ……」

最後に這入つてきた鶴来さんは家庭科室の扉を閉めた。ちよつとほこりっぽいかな、こじ。

「お姉ちゃん、でも、バレたら怒られないかな？」

「私はついつい不安を口にしてしまつた。

「確かに、お姉ちゃんの眞つとおり、使用禁止の可能性もあるわね。まだ火器類は使用できるみたいだし、しうぼうと鶴来さんはコンロの火をつけた。

鶴来さん、危ないよ？ 意外と手が早いのかな。

「誰かここで遊んでいないか見回りがくることがあるんじゃないのかしら？ あら、水も出るのね」

「ああ、鶴来さん、そんなにいじつたらダメですよお」

「ちつちつちつ。……まどかに冴子よ。誰も使つていなければ、安全なんだよ」

あらあらついつい、という鶴来さんを遮るよつて、お姉ちゃんは指でメトロホーム。すると、鶴来さんは、

「どうのは？」

「これを見たまえ」

一ヤリと笑い、メトロホームをしていた指先で、大判の机の表面をぬぐつ。

「ふむ。予想通り。ずいぶん清掃に這入つていないうだな。四ヶ月分の埃だ」

「なんでそんなことがわかるのかしら？」

「ウチが掃除しない人間だからさ。簡単な推理だよ。経験則に基づく推理だよ。灰色の脳細胞を使つ」ともない

「自慢するよつて言つたわね」

「むむつ」

「お姉ちゃんの指先、灰色だね！」

「あいた！」

ズビシッと指でチョップされちゃつたよ。

「うう。今鶴来さんに向けられたチョップが私に軌道修正された気がするんだけど、違うのかな。

「年末の大掃除が最後か……。それにこの学校に調理器具を使つような部活はない。昨年度の冬休み明けも、春休みも、だれもここを訪れちゃいないのさ。これを安全と言わずになんと言おつ……。」

「あ、あんぜん……？」

頭の埃を落としながら私は聞き返す。

「……とは言えないような気もするのだけれど」

「まあまあ、そんなこと言つてないで、とりあえずお弁当広げるた

めに少しだけ掃除しようぜ。ほり、おじかは清潔なぞつきん探して
くる！ 泳子はちりとつとほつきな！」

「わかつたよ！ お姉ちゃん！ お腹空いたもんね！」

善は急げ、だつて。はやくここの食べちゃえれば、大丈夫だよね。

「たまき……ちやんは？」

怪訝な顔をする鶴来さん。

「お腹を空かせて待つとする。立派だろ？」

うん！ お姉ちゃんらしくて、かわいいよー。私お姉ちゃんのためにお掃除がんばるね。

「…………むれあ…………」

「あれ？ 鶴来さん？ 大丈夫ですか？」

「…………鎮まれ…………鎮まれ…………シズマレ…………」

髪の毛がふわふわっと逆立つて、また右手が…………ひーん、鶴來さんが！

「大丈夫、」めんなさい、なんだか昔を思い出してしまつて
しゅぼん、と鶴来さんから変なオーラが消える。

「ほひ、いい思い出か？」

「なわけないじゃないのよ！」

掃除、さつと済ませるわよー と鶴来さんがなにやらやる気を
出したみたい。

これならすぐに弁当を広げられそうだよ。

ありがとう、お姉ちゃん。鶴来さん。

私のわがままに付き合ってくれて。

入学式とお弁当と空き教室⑥

「「」れ、おこしわ……」

「だるー？ 血饅の妹だからなあ」

へへへ。

お姉ちゃんも、鶴来さんも、一人とも私のお弁当食べて笑顔になつてゐる。

家庭科室の片付けはすぐに終わつた。

私はお掃除も好きだから、あつとこいつ間に終わらせ、ランチタイムです。

今日のお弁当は、まず一番下は、おにぎりだよ。中身は、鮭、梅、シーチキンマニア。

二段目はサンドウイッチ。タマゴ、ハム。

三段目はお野菜中心の和食総菜詰め合せ。

四段目はね、えへへ。

「けれどもして最上段にアスパラベーコン炒めがぎりしつ詰まつているのかしら？」

「えへへ。お姉ちゃんの大好物だからですよ」

一番上にお姉ちゃんの好物でいっぱいにするのは、私の特技なんですね！

「でも多すぎるんじゃない……」

「おかわり」

あ、お姉ちゃんだ。

「はい」

「オカワリッ！」

「はいっ」

「OKAWARI（めつわや良い声で）」

「わひひとえつ」

「……何ぞのわん」スタイル……つてアタシまだ食べてないわ！」

あら~り、もうアスパラベーコン炒めがなくなつてしましました。

お姉ちゃん美味しそうに食べててくれて、嬉しいなあ。私それだけでお腹いっぱいだよ。

「お、冴子も食べたかったのか。まあしかしまじかの料理を振る舞つてもらえただけありがたいと思つんだな」

「いえ、まあ、そうなんだけど……感謝もしているのだけれど。でもなんでたまきちゃんがこんなに偉そなのかしら……こほん。まだかちゃん、ありがとう、同じクラスになれてよかつたわ」

かわいい笑顔だなあ。

笑わないと、きりりとしたちょっと強面になるのに、笑うといふにふわふわするんだ。

私は鶴来さんの紙皿にサンドウイッチを取り分けて。

「私も入学式の時、鶴来さんが隣でよかつたです。……でもなんであんなに笑われたのかな？」

「まさか、冴子と友達になれてよかつたじゃないか。あれは良いボケだつた」

そつかよかつたんだね、お姉ちゃん。それで鶴来さんと友達になれたんだよね。

「まどかちゃん」

「なんですか？ 鶴来さん？」

「そう、それよ」

ビシイリとひとをし指を反らしてクールにウインク。

「へ？」

鶴来さんの表情がきりりとなつた。

「友達になつたんだから、敬語はちよつと違和感があるわ。同級生なのだし」

「変ですか？」

「変よ。だからこれからは冴子つて呼んでほしいし、敬語もダメ」

「そうだな。ウチはもう冴子のことを冴子と呼んでるからな」

おにぎりを両手に持つてお姉ちゃんはもぎもぐしながら言つ。か

わいによー。

「……たまきちゃんには敬語を使って欲しくなるのせなぜかしら」
ちまちまとリストみたいにサンデーウィッシュを食べるつむ……汎子ちゃんかわいいや。

田移りしちゃうよ。

「でもでも、そうだね、つむ……汎子ちゃん、がんばるよー。ふい

！」

汎子ちゃんはとても素敵な人。

友達になれてよかつたな。

「ね？ お姉ちゃん。あ、」飯粒ついでこるよ

「お……お、おう」

私はひょいとどご飯粒をお姉ちゃんの口元から拾い上げる。
お……おろへ。

「どうした？ おどか

おおおおおお、お姉ちゃんの口元に付いていた……ああああああああたたたた食べていいかな？ いいよね？

「これはあれだよ、食べ物粗末にしたらいけませんつてこうアレだよ。

べべべべ別におおおおおおお姉ちゃんの口元に付いていた……！

「なんか汗かいているじゃないか。熱でもあるんじゃないのか？」

。ア。

お、おお、おでことおでこでガールミーツガール……！

ノンノンー これが噂のシスター＝ツシスター……！

「つこでこウチのおじさつ返して貰うわ！」

「指す、すす、す」

吸われたああああ！

私は顔から火が出そうになつて、がばっと体を反らす。
「あら、市販の風邪薬なら持ち歩いているけれど、使う？」
さ、冴子ちゃん……や、やさしいいい！

「ななななんでもないです大丈夫ですう！ マイラブイズフォーエバー」

「……本当に大丈夫なの？ まどかちゃん時々様子が変よ？ 朝から風邪気味だつたんじゃ？」

わわわ私がお姉ちゃんのこと好きなのはれちゃう！

冴子ちゃんって勘が鋭いの？

「ああ、まどかのやつ、いつもこんな感じだぞ？」

「そそそそうだよ、冴子ちゃん、まどかのやつ、じつ、これが正常だぞ！」

「……そ、そうなの」

「なんとかごまかせたよ。ふう。

「しかしこうやって並んでいるとじぶんを見ていると本当にそつくりね。性格はまるで違うから表情が違つて見分け付くけど、黙つたられたらわからないわ」

「まあ双子だからなー」

お姉ちゃんが私から離れて、再びおにぎりに手を伸ばす。ちよつと残念。もう少しだけ……。

「美人な方がお姉ちゃんだよ？」

「外見は同じに見えるわよ」

「そつかなあ」

すると、お姉ちゃんがもぐもぐしながら。

「まあ、一つだけ違うのはほくろの位置だなうん。そうそう、私は唇の右下。お姉ちゃんは唇の左下にほくろがあるんだよね。

「あら、よくよく見れば

「ちなみにウチの誕生日は6月11日午後11時50分。チエジウと一緒だ」

「あ、私は6月12日午前0時10分。松井秀喜と一緒にやーーー。

「え、ああ、うん。そうなのね」

あれ、鉄板のネタが……。

と、そのとき、家庭科室の扉がガラガラと開いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8627z/>

梅園さん家のたまきとまどか

2011年12月30日22時51分発行